

# 敦煌写本〈悉曇章〉類の特異性

——『禪門悉談章』のテキスト研究——

小林 圓 照

## はじめに

一般に悉曇（悉談，悉檀，siddham）とは，梵字の字母の総称であり，梵字の書体及び字母表や綴字法，梵語の読法，文法，語句の解釈などを記述したものを〈悉曇章〉と言う。敦煌写本テキストの中にも数種の〈悉曇（談）章〉類がある。例えば『般若心経悉談章（仮題）』、『俗流悉談章』，あるいは，今回テーマに採り上げた『禪門悉談章』などがある。これらの特色は，一般の〈悉檀章〉とは異なり，字母全体に互る論述ではなく，とくに『鳩摩羅什法師通韻』や『涅槃経悉曇章』を素材的な根拠として，母音字音（摩多〈māṭṛkā〉・母，韻）の 16 韻のうち，頻度の少ない  $r$ ,  $\bar{r}$ ,  $l$ ,  $\bar{l}$  の 4 韻（魯・留・廬・樓の〈別摩多〉，他の 12 は〈通摩多〉と呼ぶ）をひとくみの基礎となる頭首の音とし論述を展開していることである。この特異性は，『禪門悉談章』においても同様である。

さて『禪門悉談章』は，正式には『仏説楞伽経禪門悉談章 并序』と呼ばれ，定慧禅師の翻出とされる。敦煌本としては，(A) P2212, (B) P2204, (C) P3099, (D) P3082, (E) S4583v, (F) BD00041-1, (G) 俄 Dx00492 などの 6 本の写本ならびにトルファン断片 (G) がある。大正新修大蔵経 85 卷には，(A) 本を定本とし (B) 本によって校訂したものが入蔵されている。これらに依り，『楞伽経』との関連，「禪門」と称される思想的な背景，あるいは「歌謡」的な展開をも検討して，『禪門悉談章』の校訂テキスト作成を目標にしたい。

## 1. 『禪門悉談章』の成立

(a) この悉談章の成立経過については，写本冒頭に付された「并序」によって明らかとなる。その序の全文と訓読をここに紹介する。（ ）内は異本による。

[序文]

佛説楞伽経禪門悉談章 并序

仏説楞伽経禪門悉談章 並びに序

諸佛子等合掌至心聽。  
我今欲説大乘楞伽悉談章。  
悉談章者，昔大乘(慧)在楞伽山，  
因得菩提達摩和尚，  
於宋家(元嘉)元年從南天竺(竹)國，  
將楞伽經來至東都，  
跋陀三藏法師奉詔(詔)翻譯。  
其經總有五卷，合成一部。  
文字浩渾(汗)，意義難知。  
和上(尚)慈悲，廣濟群品(生)

通經問道，識攬懸(玄)宗，  
窮達本原，皆蒙指受。  
又嵩山會善沙門定慧翻出悉談章。

廣開禪門，不妨慧學。  
不著文字，並合秦音。  
彼(又)與(以)鳩摩羅什法師通韻，  
魯・留・廬・樓爲首。

諸仏子等よ。合掌して至心に聴け。  
我れ，いま大乘楞伽の悉談章を説かんと欲す。  
悉談章とは，むかし大乘(慧)，楞伽山に在り  
菩提達摩和尚，  
宋家(元嘉)元年，南天竺(竹)国より  
楞伽經を將ちて東都に來たり至るを得るに因り，  
(求那)跋陀三藏法師詔を奉じて翻譯す。  
其の經總じて五卷あり，合して一部をなす。  
文字浩瀚にして，意義知り難し。  
<達摩>和上(尚)慈悲もて群品(生)を廣濟せん  
と，  
通經，問道して玄宗を識攬し，  
本源を窮達して，皆な指受を蒙る。  
また嵩山の會善(寺)の沙門定慧，悉談章を翻出  
す。  
広く禪門に開きて，慧學を妨げず。  
文字に著せず，並に秦音に合す。  
かの(又)た鳩摩羅什法師の通韻を以て，  
魯・留・廬・樓を首となす。

(b) この『禪門悉談章』の成立の因縁は，菩提達摩大師の『楞伽經』将来譚から始まる。大乘が南天竺国の楞伽山に広まっていた頃，宋家元年に，達摩は『楞伽經』を持って東都(洛陽)にやって來たという。そこで達摩の諮請を受けて，求那跋陀羅が翻譯することになる。ここでは「奉詔」の訳業で「奉詔」ではないであろう。跋陀三藏の訳が五卷一部となったと言うが，通常，跋陀訳は「四卷楞伽」といって，五卷とはされないのので，ここにも問題がある。そこで達摩大師は，慈悲をもって広く衆生を救済しようと，この經を会通して禪道を問い，広い見識をまとめて宗旨に懸けていた。そして遂に經の本質にまで窮達し，人々にその教えを授けて，指導することが出来たという。これは一貫して，「『楞伽經』に基づく達摩禪門」が内容になっている。ここまでの資料段階からは，「達摩から跋陀へ」とか「跋陀から達摩へ」といった祖統説や唐土の初祖説など，あるいは更に，『禪門悉談章』の内容が北宗禪系に属するとか，南宗にも通ずる処があるなどの議論を持ち込む必要はないであろう。ただ定慧平等のバランスを意識していることは明らかである。

(c) この達摩禪門をより広く宣布しようとする意図のもとに『禪門悉談章』が作成されることになる。翻出者は，嵩山の會善寺の沙門・定惠(定慧)禪師である。

(38)

## 敦煌写本&lt;悉曇章&gt;類の特異性 (小林)

その目的は、「楞伽思想に基づく達摩禅門」の公開であり、その内容は、禅理を研究する「慧学」の障礙にもならないし、よりそれを進めることに資し、しかも不著文字を旗印とする禅本来の「定学」にも違反しない。しかもインド悉曇音を導入して、その形式は秦音（中国音韻）にも調和している。なぜなら鳩摩羅什法師の<通韻>の中の魯・留・廬・樓の四流音を頭首の音として、この悉談頌曲が編成されているからである。以下、20句前後で唱われた全8首の構成とその内容を検討する。

(d) この序の文脈からは、達摩が主役であって、求那跋陀羅は脇役である。達摩が『楞伽經』を将来したというフィクションまで作って、達摩を楞伽の流れの中心に位置づける。

(e) 『羅什法師通韻』は、S1344 にあり、この4音を首となすとある。『涅槃經』文字品（正蔵12・655a）では、この4音は、仏・法・僧・対法（随順世間）の4義があり、仏教を総撰するシンボルとなる。

## 2. 各首の構成とその検討

## (a) 第1首「捨縁清浄座」の構成とその内容

〔本文〕

頗邏墮 頗邏墮	頗邏墮！ 頗邏墮！	(3音 + 3音)
		○○○ ○○○
第一 捨縁清浄座	第一 捨縁の清浄座	(2音 + 5音)
		□□ + □□□□□
萬事不起眞無我	萬事不起なるは眞の無我、	□□□□□□□
直進菩提離因果	菩提に直進して、因果を離る。	□□□□□□□
心心寂滅無殃禍	心心寂滅して、殃禍なく、	□□□□□□□
念念無念當印可	念念無念にして、當に印可すべし。	□□□□□□□
		(7音)
摩底利摩 魯留廬樓	摩底に摩を利す、魯 (r) 留 (r̄) 廬 (l) 樓 (l̄) !	(4音 + 4音) ○○○○ △△△△
頗邏墮	頗邏墮！	(3音) ○○○
諸佛(弟)子、	諸弟子よ！	(4音) □□□
莫懶墮自勸課	懶墮なる莫れ、自ら勸課せよ。(6音)	□□□□□□
愛河苦海須度(渡)過	愛河・苦海を須らく度(渡)過すべし。	□□□□□□□
憶食不飡常被餓	食を憶うも飡せず常に餓を被る、	□□□□□□□
木頭不攢不出火	木頭攢せずんば火を出ださず。	□□□□□□□
□□□□□□□	—————<欠>—————	(7音)

耶羅邏(羅)	端坐	耶・羅・邏!	端坐せよ!	(3音 + 2音)
娑訶耶	莫臥	娑訶耶!	臥す莫れ!	○○○ □□
				○○○ □□

第1首の構成を検討する上で、一応、全体を初部・中部、後部に分けるとして、前部は、「頗邏墮 (ha-ra-da), 頗邏墮」の悉曇(梵)音(○表示)による第1句と第2句とし、次いでタイトルの漢音(□で表示)を第3句、頌を形成する第4句から第7句までと、悉曇音の「摩底利摩 (ma-ti-li-ma)」を第8句、母音の流音4音 (ra, ra, la, la) を第9句とした。中部は、「頗邏墮」の第10句と「諸仏子」と呼びかけ、教示をする句を第11句とし、頌を形成するのを第12句から第15句とした。後部は悉曇音「耶羅邏 (ya-ra-la)」を第16句、続く漢音2音を第17句とし、同じく悉曇音「娑訶耶 (sa-ha-ya)」を第18句とし、最後の漢音2音を第19句とした。中部の第4句は欠落したものと見なした。2つの頌の第7音は同韻である。よって墮, 座, 我, 果, 禍, 可, 摩, 課, 過, 餓, 火, 坐, 臥が押韻されている。

第1首のテーマは、「諸々の雑縁を捨離して清浄に坐す」のであるから、第1頌は、禅門に入る基礎である。妄念起らざる処が真の無我であり、菩提心を発して、覚悟を目指し、まっすぐに進めば、自然に輪廻流転から離脱できる。心心寂滅ならば何の過失なく、一念一念、無念であれば、達摩禅門の心印に契合するのである。第2頌は第1頌を実践する上での教誡である。愛憎と苦難の河海を無事にわたるには諸々の欲望の記憶と追求に終始しては、そこから解放されるべきもない。木切れも摩擦しなければ点火しないのだから、煩惱の火を燃え立たせないよう思念を鎮静すべきである。後部は、清浄の端坐を保って、臥すなかれと叱咤する警句である。

さて悉曇音は、なんらかの宗教的な意味ないし意義を含んでいるのではないか。特に耶羅邏 (ya-ra-la) は、悉曇表では遍口声(口中の全機能を使用する発声)の3連音である。また娑訶耶 (sa-ha-ya) は、全首の結句となると考えられ、サンスクリット語の“sahāya” < 助伴・同事 > を含意して、「みなともに」! と促して、唱和の呼びかけと理解することが可能となる。章全体に及ぶ梵漢調和のリズムとメロディーは無論のこと、発声上、インド音楽の音階をも指示する視点からも、研究の余地がある。第1首以下、すべて所収の詩頌は漢詩としては7言のゆるやかな定型で、各行の最後、第7字に押韻され、韻字は仄音である。近体詩(絶句, 律詩)の格を守ったものではない。

(40)

敦煌写本&lt;悉曇章&gt;類の特異性 (小林)

## (b) 第2首「住心常看淨」の構成とその内容

只(質)領盛 只領盛  
 第二 住心常看淨  
 亦見亦聞無視聽  
 生滅兩亡由(猶)未證  
 從師授語方顯定  
 見佛法身無二性  
 性頂領徑(性) 魯留廬樓  
 只領盛  
 諸佛子 莫瞋佞□□□  
 三毒忽起無佛性  
 癡狂心亂惱賢聖  
 眼貪色塵耳縛聽  
 背却天堂(道)向惡徑(境)  
 盈令令(今)修定  
 娑訶耶 歸正

只領盛！ 只領盛！  
 第二 住心して常に看淨す  
 また見、また聞くも視聽なく、  
 生・滅を両つながら亡ずるも由お未だ証せず。  
 師の授くる語に従って、方めて定を顯し、  
 仏法身の無二の性なるを見る。  
 性頂に性(徑)を領す、魯・留・廬・樓！  
 只領盛！  
 諸仏子よ！瞋佞なる莫れ！  
 三毒忽ち起らば仏性なく、  
 癡狂心亂し、賢聖を悩ます。  
 眼に色塵を貪り、耳は聴に縛され、  
 天堂に背却して、惡境に向かう。  
 盈令令！ 定を修し、  
 娑訶耶！ 正に帰せ。

第2首の構成の基本は、第1首と同じである。第2頌も4句あり、整っている。ただ中部分の教誡が、第1首が6音に対して、3音「莫瞋佞」と短いので、押韻が最後に来る3音が欠落した可能性がある。悉曇音に関しては、「只領盛」には「質領盛」の異字がある。また「性頂領徑」は他の首の例句と音韻上から「性頂領性」であったと言えよう。令を今とする異字もあるが「盈令令」を採った。この句も首全体で19句となる。

第2首の基本となる内容は、住心・看淨であり、禪門での初歩であるが、のちこの点が強調されると、いわゆる北宗禪の立場ということになる。ただ仏法身に無二の性を見るというのは、まさに「見性」に当たり、南北別なく、達摩禪門、一般のことともいえる。実践面では瞋佞の妄念からの脱却を意図し、向上に違背することを警告している。修定の句は必ずしも修定主義ではあるまい。

## (c) 第3首の「看(有)心須併儻(當)」の構成とその内容

頃(復)浪養 頃浪養  
 第三 看心須併(屏)儻(當)  
 掃却垢穢除災障  
 即色即空會無想  
 妄想分別是心量  
 體上識體實無謗  
 謗底利(裏)謗 魯留廬樓

頃浪養！ 頃浪養！  
 看心して須く屏当すべし。  
 垢穢を掃却し、災障を除き、  
 即色即空ならば会(かならず)無想なり。  
 妄想分別はこれ心量、  
 体上に体を知るは実に謗なし。  
 謗底利の謗！ 魯・留・廬・樓！

頃浪養

諸佛子 莫毀謗

一切皆有罪業障

他家聞聲不相放

三寸舌根作没向

(道長説短惱心王

心王不了説短長)

來世業道受苦殃

羊良浪 併當

□□□淨掃{堂中}

<娑訶耶 須供養>

頃浪養!

諸仏子よ! 毀謗するなかれ,

一切, 皆な罪業の障あり.

他家の声を聞いて相放たず,

三寸の舌根は作没に向かう,

長と道い, 短と説きて, 心王を悩ます,

心王了(さと)らずして, 短長を説く.

來世の業道に苦殃を受く.

羊良浪! 併當!

□□□! (堂中を)淨掃せよ!

娑訶耶 須く供養せよ!

第3首の構成での問題点は、第2頌に2句が加わって6句となること、第4・第5句が一連の挿入句と考えられ、韻も一致しないことである。最後の2句は便宜的に一応、淨掃と供養との二つの踐行として分けてみた。よって第3首は都合、22句となっている。

第3首の主要テーマは、心を観察して「併儻(當)」することすなわち心を等しく合わせて、余裕を持ち拘りを無くすることであり、それが垢穢や災障を除くもとである。色即空、空即色の無相の根本を体得できれば、他に誹謗すべきものは何もない。実践面では、「毀謗」(他への悪口・非難=四卷楞伽では誹謗(apavāda)の悪見)を避け、心の淨掃と供養とを勧賞する。

#### (d) 第4首の「八識合六七」の構成とその内容

拂粟質(栗只) 拂粟質

第四 八識合六七

看心心本是禪室

法身身法智非一

五眼六通光(廣)慧日

言下便悟實無密

密底利(領)密

魯留廬樓

拂粟質

諸佛子 莫放逸

無始已來居暗室

生死流轉不得出

只爲愚迷障慧日

□□□□□□□□

逸粟(票)密 逸粟密

拂粟質! 拂粟質!

第四 八識は六七と合す.

看心, 心本と是れ禪室,

法身と心法, 智は一に非ず,

五眼, 六通, 慧日を光(かがや)かす,

言下に便ち悟れば實に密なることなし.

密底利の密

魯・留・廬・樓!

拂粟質!

諸仏子! 放逸なる莫れ.

無始より己來, 暗室に居り,

生死流轉して出ざるを得ず.

只だ愚迷なるが為に慧日を障す.

逸粟密! 逸粟密!

(42)

敦煌写本&lt;悉曇章&gt;類の特異性 (小林)

娑訶(耶) 直(眞)實

娑訶耶！ 直実なれ！

〔内容の検討〕八識合六七は、この經の所説と対応する。前詩頌の「慧日を光す」と後の詩頌の「慧日を障す」とは、禪室と暗室との明暗を対照化する句となっている。

## (e) 第5首の「実相門中照」の構成とその内容

曉燎(了)曜 曉燎曜

曉燎曜！ 曉燎曜！

第五 實相門中照

第五 実相門中の照

一切名(利)妄呼召

一切の名を妄りに呼召し、

如己等息貌非貌

己の如く等しく貌と非貌とを息せよ。

非因非果無瞋咲

非因非果にして瞋笑なく、

性上看性妙中妙

性上に性を看るは妙中の妙なり。

要底裏要 魯留廬樓

要底裏の要 魯留廬樓

曉燎曜

曉燎曜！

諸佛子 莫瞋咲

諸仏子よ！ 瞋笑する莫れ

憂悲瞋咲是障道

憂悲瞋笑はこれ道を障うるなり。

於此(道)門(中)無(瞋)咲

(此の道門中に於いて瞋笑なし、

澄心須看内外照

澄心して須く見て、内外を照らすべし。

眼中有翳須磨曜

眼中に翳あらば須く磨曜すべし。

銅鏡不磨不中照

銅鏡も磨せざれば、照に中らず。

遙燎料(了) 作好(除掃)

遙燎料！ 好を作(な)し(除掃せよ！)

娑訶耶 莫惱(淨掃)

娑訶耶！ 悩む莫れ(淨掃せよ！)

〔内容の検討〕後の詩頌の第2句を除いて、4行に調えたほうがよい。すでに第1句での「憂悲瞋笑是障道」と重なる。

## (f) 第6首「心裏禪門觀」の構成とその内容

按頼畔(額崖)按頼畔

按頼畔！ 按頼畔！

第六 心裏(離)禪門觀

心裏の禪門觀

不來不去無崖畔

不來不去にして崖畔なく、

覺上看覺除定亂

覺上に覺を看て定亂を除く。

佛與衆生同體段

仏と衆生とは体段を同(とも)にし、

本原(元)清淨塵垢散

本原は清淨にして塵垢を散ず。

歎(散)底利歎(散)魯留廬樓

散底利散！ 魯留廬樓！

按頼畔

按頼畔！

諸佛子 莫慢著(慢侃)

諸仏子よ！ 慢着する莫れ

道上大有羅刹喚

道上大いに羅刹の喚あり、

愚人來去常繫絆

愚人は來去して常に絆に繋がる。

染著色塵心繚亂

色塵に染著して心を繚亂し、

行住坐臥無體段

行住坐臥に体段なし。

在於衆中漫叫喚  
 得他勸諫即厥難  
 耶羅邏 茶灌  
 娑訶耶 鈍漢

衆中に在って漫りに叫喚し、  
 他の勸諫を得て、即ち厥難す。  
 耶羅邏！ 茶を灌げ  
 娑訶耶！ 鈍漢なり。

[内容の検討] 前詩頌の第4句の末字は「散」以外はありえないと思うが、写本は「歎」が多い。のちの6行の詩頌は、4行の定型との整合性はどうか。内容の上で、前詩は原理的な立場、後の詩は実践的な行を示すが、茶灌と鈍漢の意味が汲み取り難い。

### (g) 第7首の「圓明大慧悟」の構成とその内容

普路(拂魯)喩 普路喩  
 第七 圓明大慧悟  
 四門十八離名數  
 生滅妙有懸通度  
 三界大師實難遇  
 生死涅槃不合渡(往)  
 愛河逆上不留住(任)  
 即心非心魔自去  
 去底利去 魯留廬樓  
 普路喩  
 諸佛子 常覺悟  
 一念淨心無汚染  
 一切魔軍自然去  
 □□□□□□□  
 □□□□□□□  
 閻閻婁 專注  
 娑訶耶 大悟

普路喩！ 普路喩！  
 第七 円明なる大慧の悟  
 四門十八の名数を離る、  
 生滅と妙有は通度に懸かる。  
 三界の大師、実に遇い難し、  
 生死・涅槃、渡るべからず。  
 愛河逆上して留住せず。  
 即心非心にして魔自ずから去る。  
 去底利の去！ 魯・留・廬・樓！  
 普路喩！  
 諸仏子！ 常に覚悟せよ！  
 一念の浄心に汚染なく、  
 一切の魔軍自然に去る。  
 \_\_\_\_\_  
 \_\_\_\_\_  
 閻閻婁！ 專注せよ！  
 娑訶耶！ 大悟す。

[内容の検討] 第6首とおなじく6行から成る。数、度、遇、渡、住、悟、染、注はどれも押韻されている。ただ去は押韻されるべきところ遇(yú)と去(gú)との音の近似によって意味を優先させたと思われる。

解説の上で、「大慧」とは、円明な智慧を指すのか、『楞伽經』の登場人物の大慧なのか、「三界の大師」とは達摩をいうのか。また十八は十八界として、四門が有・空・亦有亦空・非有非空であれば、天台思想との関連が問題となる。

### (h) 第8首の「禪門絶針(斟)酌」の構成とその内容

嘎略藥 嘎略藥  
 第八 禪門絶針酌

嘎略藥！ 嘎略藥！  
 第八 禪門は斟酌を絶す。



(44)

敦煌写本&lt;悉曇章&gt;類の特異性 (小林)

不高不下無樓閣  
 不出不入無城郭(廓)  
 示(是)想顯(現・原)聲即初學  
 生心動念勿令著  
 久坐要功作無作  
 無樂可樂是常樂  
 慧燈一照三千廓  
 定水常清八萬鑠  
 十方諸佛同開覺  
 覺底利覺(博) 魯留廬樓  
 嗔略樂  
 諸佛子 自在作, 莫制約  
 四維上下不可度  
 住寂涅槃同門廓  
 甚安樂 無著  
 娑訶耶 等覺

不高不下にして樓閣なく,  
 不出不入にして城郭なし.  
 想を示し〔(是)の想の〕声に顯るは即ち初学,  
 生心動念して著せしめる莫れ.  
 久しく坐して功を要(もと)むるは, 作の無作,  
 樂の樂とすべき無きは是れ常樂なり.  
 慧燈一たび照らさば, 三千の廓,  
 定水は常に清くして, 八万鑠  
 十方の諸仏同じく開覺す.  
 覚底利覚 魯留廬樓!  
 嗔略樂!  
 諸仏子よ! 自在に作して, 制約する莫れ  
 四維・上下, 渡るべからず.  
 寂涅槃に住して, 門廓(開覺)を同じくす.  
 甚安樂! 著するなく,  
 娑訶耶! 等覺す.

[内容の検討] 詩頌の9句との中の2句は, アンバランスである. 後詩の2句に前詩から移動させる可能性があるかどうか. 内容的には, 結論として開覺の境地は相対, 斟酌を超えて諸仏と平等であることを示している

### 3. 結語

以上、『禪門悉談章』の序文ならびに全8首のテキストの構成と, その内容についての検討の結果, ほぼその概要を把握できたと思う. この章が「楞伽思想を基礎とした達摩禪門」を高揚・宣布するための頌曲であったことが認められる. 現段階では, 現存写本の状況から完全なテキストの復元は困難であるが, さらに精細を期したい. この章の編成者の定慧禪師については, 北宗の淨覺派の人物, あるいは百丈下の大慈寰中(780-862)との説があり, 歌謡的な展開についても梵漢両面から論じたい.

参考文献・注記などはすべて省略する.

<キーワード> 楞伽經禪門悉談章, 悉談頌曲, 娑訶耶, 定慧禪師

(花園大学名誉教授, 文博)